

## 後白河院政期の絵巻物制作における静賢の役割について

永井久美子（東京大学）

静賢は、後白河天皇の近臣として活躍した信西の子息の一人であり、幼少期より仏門にありつつ、自身も長きにわたり後白河院に近侍した人物である。承安元年（一一七一年）、後白河院の院宣を受け「後三年絵」を絵師明実を描かせたことが『吉記』および『康富記』から知られており、静賢は院宣を奉じて絵師や能筆に依頼を出すといった実務を担当していたものと思われる。後白河院の所持する絵巻物は蓮華王院宝蔵に収められていたことが知られるが、この蓮華王院において寺務の責任者たる執行に任じられていたのが静賢である。静賢が「後三年絵」以外の絵巻の制作にも関与していたことを考えてみてもよいのではないだろうか。

静賢の父である信西は、平治元年（一一五九年）、「長恨歌絵」を蓮華王院に施入している。信西が付したという跋文によれば、藤原信頼らによる平治の乱を予見し、君心を諭すために献上されたものであるという。「長恨歌」を絵巻の主題として選択したのは信西と考えられ、物語絵巻の制作を通して、信西が後白河天皇の治世の安泰を願っていたことが窺えよう。

信西の息子である静賢の絵巻制作への関与方法も、単なる絵師や能筆らとの連絡役というだけでなく、絵巻の主題選択に関わるものではなかったであろうか。ただし、「長恨歌絵」の跋文の内容から察するに、父の信西の方が、後白河天皇の後見役として比較的積極的に絵巻の主題を選べる立場にあったのではと推測され、静賢の方は、後白河院からの要望に適宜応じる形で、絵巻の主題を選択する状況にあったのではないかと考えられる。

しかしそれでも、静賢が果たした役割は少なくなかったと思われる。現在伝わる物語絵巻の詞書は、静賢によって説話集から選ばれ、編纂されたものではなかったか。そして主題選択にあたり大きな意味をなしたのが、『江談抄』の伝来に代表される、信西一族の学識であったと考えてみたい。『江談抄』がまとめられる際、大江匡房の談話を書き付けた人物は、信西の父、すなわち静賢の祖父にあたる藤原実兼であった。

たとえば「吉備大臣入唐絵巻」は、その詞書とほぼ同文の説話が『江談抄』に収められている。「後三年絵」の場合、現在伝わる絵巻は改作本であるが、雁行の乱れにまつわる段落は、義家の勝利は匡房から授けられた兵法によるものであったとする物語は、静賢が作らせた承安本にすでに存在していたものと考えてみてもよいであろう。また「伴大納言絵巻」の場合、応天門の変を取り上げた説話が複数『江談抄』にあったことを素地に、新たにまとめられた物語がその詞書ではなかったか。匡房に連なる静賢の学識が、後白河院政期の絵巻制作を支えていたと考える。

院近臣による主題選択という視点から、後白河院時代の絵巻物制作について、信西の生前とその没後を細分して考え、静賢が果たした役割について考察する。